

2016年度 学校評価自己評価

1. めざす学校像

2017.3.31

<p>大阪女学院の建学の精神 (ミッションステートメント／2009年9月15日制定)</p> <p>大阪女学院は 創造主を畏れ キリストの教えに従って 一人ひとりを愛し 何が重要であるかを見抜く力を養い 喜びをもって 進んで社会に仕える人を育む</p>	<p>大阪女学院が育もうとする学生・生徒像</p> <ul style="list-style-type: none"> *キリスト教に基づく愛と奉仕を実践する人 *自由な学びの中から、物事の本質を見つめ、自己の進路を選ぶことのできる人 *英語力を基礎に幅広い教養と公正な判断力を身に付け、自律的・主体的に行動できる人 *性別の役割にとらわれずあらゆる可能性に挑戦し、女性の尊厳の確立に努め、リーダーシップを発揮する人 *社会の課題に関心を持ち、世界、日本、地域のために仕える人
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2. 中期的目標

運営基本方針 (2014～2019年度／Ⅰ期及びⅡ期中期計画において)

グローバル化の進展に伴う市場原理による競争主義の台頭により、我が国においては、経済をはじめとして社会のあらゆる分野における既存のシステムの変革が迫られている。さらに、「知識基盤社会」における「知」は容易に国境を越えるものであることから、グローバル化は教育と密接な関わりを持つことは論を待たない。大阪女学院は、このような環境変化に的確に対応するとともに、130年間にわたり育んできた精神を堅持し、2014年度から2019年度において、次の方針によって、健全な運営を創出する。

- *教職員の知恵と力を結集して、歴史と伝統に証される良き学校運営を継承する。
- *これまで育んできた学生・生徒像、人格を育む教育力、積み上げてきた教育・研究活動の成果を広く社会にアピールし、学生・生徒の安定的な確保に力を注ぐ。
- *本学の建学の精神を実現するために変化しなければならないことについては、強い決意をもって迅速な対応を行う。

Ⅰ. 建学の精神と教育理念の実践

2016年度事業計画より

1. キリスト教に基づく人間理解の深化

大阪女学院中学校・高等学校は女性が一人の人格として、何らかの方法で働く義務を悟り、正直に仕事をするを誇りとし、日常生活の雑事を越えて、物事を見抜く力をもつ人間を育むことを目指す。宗教教育については、長年の実績を踏まえた上で、キリスト教に基づく人間理解を深め、一人ひとりがかけがえのない存在であることの自覚を促し、生徒自らの生き方と他者とのかかわり方を学ばせる。また、入学後、保護者に対しても、学校への理解を深めてもらえるよう努める。

2. 建学の精神の再認識と再構築

本校が、国際的な視点に立つミッションスクールとして、また女子の教育機関として設立されたという建学の精神を再認識し、先行きを見通すことの難しい時代だからこそ、生徒が自分の内面と向き合いつつ、変わる事のない確かな神の存在に気づくことができるよう、教育の充実に努める。キリスト教学校教育同盟と連携しながら、「道徳」の教科化への研究を行い、キリスト教教育への共通理解と位置づけを再確認する。

Ⅱ. 教育の内容と学習支援の充実

教育理念を具現化するため、地震に与えられた賜を活かし、者会に貢献するために生涯学習し、成長を続けていく「真の学力」ー学力、協調性、人権意識、規範意識、国際性ーの習得を目指す。

学力向上の取り組みー新しい学力観への対応

学力についての考え方が「思考力・判断力・表現力」及び「意欲・経験・多様性」を重視する方向に大きく転換していく現代、本校が従来から行ってきた国際的な視野と主体性を育てる教育活動をさらに進めていく。また、先進的な教育活動を研究し、導入する。

- (1) 自学自習、自己管理能力の養成…OJダイアリー、学習計画表の活用
- (2) 論理的思考力の育成…「論理エンジン」の導入、探究型課題学習への発展
- (3) シラバスの検討・改善…教科学習のシラバスの見直しとともに、宗教・人権学習・ボランティア・クラブ活動・生徒会等の活動を関連づけ、総合的なプログラムの構築を目指す。
- (4) 英語科、英語教科としての英語改革…高2英語科対象エンパワメント授業の継続、発展。4技能英語外部検定取得の体制づくり(高1・2へのspeakingの導入)
- (5) 「国際特別入試制度」(中学2015年度より)の継続と発展…入試広報に努め、この制度による入学生の学習プログラムの整備を進め、国際理解教育を推進する。
- (6) 国際バカロレア(日本語DP候補校として認定校を目指し、探究型・教科横断型の授業を展開する為に全教職員で学びを進める。また海外への進学を含め、世界を視野に入れた進路指導を行う。
- (7) 高等学校普通科理系の2コース制の導入…受験生及び中学内部進学生のニーズに応じて開設した理系1類、2類を充実したものとし、希望進路を保障できるよう整備する。

2. 国際理解教育の推進

留学や留学生との交流を通じ、言語への関心を深め、言語や文化の違いを知ることで、世界に目を向け、広い視野をもって物事を考える生徒を育てる。YFUの年間留学生受け入れに加え、オーストラリアのRavenswood校(姉妹校)との交換留学、カナダのオタワにあるLongfield Davidson校(姉妹提携校)、YFU韓国からの短期交換留学(1ヶ月)との交流を通して、国際(異文化)理解に取り組む。また、交換留学制度を利用して、留学を希望する生徒の支援をしていく。高等学校3年間で実施している現行留学制度(夏期海外研修・短期留学・年間留学)に加え、高等学校1・2年時3学期に実施する中期留学制度を新設し、充実に図る。

3. 生徒・教員の人権意識を深める取り組み、生徒の心身の健康と安全を守るための生活指導と生徒支援

人間関係を構築する力の育成ールール遵守、マナー・礼儀の尊重、コミュニケーションによる他者理解ーに努める。SNSを利用するための知識、メディアリテラシーについて適切に学ぶ。

4. 学校行事による集団づくり

さまざまな行事への生徒の主体的な関わりにより、集団の中で自他を活かして協調性、創造性を育む。

Ⅲ. 教育の実施体制の改善

1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み

- (1) 広報の充実 (2) 説明会・学校訪問への全教員での取り組み (3) 入試対策室の充実 (4) 中学「国際特別入試制度」の継続と発展

2. 教員の人材育成

- (1) 建学の精神の学び (2) 世界の変化や課題についての学び (3) 支え合う組織づくり (4) 他校との連携 (5) 新しい学力観への対応 (6) 新しい授業形態への対応

3. 中学・高校としての図書館機能の充実

- (1) 蔵書充実 (2) 利用教育 (3) 図書委員会活動 (4) 広報の充実 (5) その他 タブレット端末活用の授業の為の環境整備

4. 組織の再構築と運営方法の見直し

- (1) 一環教育の為の人事 (2) 学年担任団のチーム力、個々の教員力の向上 (3) 休日のクラブ縮小と礼拝出席の奨励

5. ICT教育の推進

- ICT技術を、今後の探究型、横断型授業に活かしていくことができるように研究する。

6. 中学・高校教務の新システムの統一と展望

- 中高の教務システムを新システムに移行する準備をはじめ。

7. 中高大短連携プログラム

- (1) 宗教・解放プログラム (2) グローバル進路 (3) 大学院との合同プロジェクト

Ⅳ. 生徒支援

生徒の自己実現を促す進路指導 (1) 進路キャリアガイダンスの充実 (2) 基本的学習習慣の確立(OJダイアリー・ビッグシスター制度) (3) 英語外部検定への対応 (4) 新しい大学入試への対応

- (5) 併設大学・短大の特色を活かした進学指導 (6) 協定校推薦枠の拡大

Ⅴ. 危機管理

大地震を想定した危険回避訓練を教職員で検討する。また食料・水等の備蓄の拡充、自宅への連絡方法の確認、帰宅困難者が出た場合の対策について検討する。

Ⅵ. 教職員の人権意識の向上

- (1) いじめ、キャンパス内防犯防止への積極的な取り組み (2) 互いに支え合う教職員集団 (3) 特別支援の充実・外部機関との連携

Ⅶ. 教員の労務環境改善

- 1週1日の研修日を継続(2年目)をはじめ、教員の多忙を緩和し、働きやすい職場にしていくよう努力する。

Ⅷ. 施設・設備の保全と充実

- 校舎外壁補修、グラウンドのスタンド補修等、必要に応じて工事を行う。

Ⅸ. 経費削減と効率化

- 中高大短、法人の事務の一元化を適宜進める。諸経費の見直し、管理部門の経費削減と効率化を図る。補助金制度を有効活用する。

【自己評価アンケートの結果と分析】

自己評価アンケートの結果と分析		
○生徒 [2016年12月実施]	○保護者 [2016年12月実施]	○教職員 [2017年 2月実施]
生徒	保護者	教職員
<p>宗教教育・解放（人権）教育について</p> <p>宗教教育については肯定的な回答率はこれまでの傾向と変わらず、程度の差はあれ、中2で停滞または落ち込みが見えるが、学年が上がるにつれて本校の目指す教育目標を理解し、キリスト教的な考え方を身につけていくことがわかる。</p> <p>解放(人権)教育についても、宗教教育とほぼ同じ経過をたどる。ただここ数年は中2での落ち込みが緩やかになりつつあったが、今年は中2での傾斜が以前の生徒に近い。自我が芽生える時期のこのような傾向は程度の差はあれ成長の過程である。宗教、解放のプログラムでの学びは、学年が上がるにつれて、これまで継続してきた基本的な人権、平和についての基本的な学びを継続しつつ、現代社会の課題である様々な国の人々との共生、(発展途上国のみならず)日本の中にある貧困、子どもの権利、非正規雇用、ジェンダーギャップなど、目の前の事象を見つめて、自身の進路、生き方と直結するものとなっている。高3までの3～6年間で、どの学年も各々の個性や人格を尊重し合い、解放プログラムで取り上げる社会的なテーマに関心、理解を深めることに繋がっている。加えて、宗教教育プログラムで聖書の言葉に触れて自己の内面を洞察し、他者との関わりについて考えを深めていく機会となっている。、徐徐にはあるが確実に、自己肯定の心を持ち、自分自身の言葉で考え、自分自身が社会に良い変化をもたらす主体となるために学ぶという意識が育っている。</p> <p>生活指導について</p> <p>本校の生活指導の中心になっている「本当の自由」への理解一人に言われるのではなく、自分で考えて時々に応じた言動をとる—という目標については、その考え方を理解し、誇りを持って目指していく姿勢は中1からみな持っており、学年が上がるごとに、実行の難しさと、その重要さを更に深く理解して行くことになる。中1での意識は年ごとに開きがあるが、70～90%を推移しながら、高3では95%に到達していく。</p> <p>具体的な「社会のルールや公共のマナーが身についているか」「基本的生活習慣(遅刻、片付け、身だしなみなど)は身につけているか」という質問については、75～90%台を推移する。生徒たちの評価は、大人の目から見た評価よりも甘めであるように思う。特に中学生は、自分の言動の不十分な点には気づいていないところが多いようだ。具体的な指導を事あるごとに丁寧に行う必要がある。保護者との連携を行い家庭の協力を得て進めていく。特に昨今のSNSの使用についてのルール、リテラシー、時間管理については、まだまだ研究が必要である。</p> <p>挨拶の取り組みは、中1から中2で下降する傾向にある。思春期独特の心理も関係するかも知れないが、気持ちはあっても声に出して表現することが苦手な生徒が多い。高校生になると実行できる生徒が増えていくが、高3以外は70%台を推移する。社会での大切なコミュニケーションの第一歩として、取り組みを続けたい。</p> <p>「自己管理能力が身についたか」について</p>	<p>保護者アンケート回収率は、中学平均 83% 高校平均 56% であり、学年、クラスによってばらつきがあるが、 中学3学年に次いで高校2年生の回収率の平均が70%と高く、ご協力に感謝する。</p> <p>課題の多い項目については、保護者のご支援に感謝しつつ、一歩ずつニーズに応える努力を行っていききたい。</p> <p>本校に入学したことについて、全学年の93%の保護者が肯定的回答をくださった。学校の教育方針も88%以上の保護者に理解されいるという昨年度と変わらぬ結果となった。</p> <p>本校のキリスト教教育が、生徒の日々の学校生活や行事、PTA(本校ではへール会と呼ぶ)活動を通して保護者によく理解されていることは本校の教育の大きな強みである。キリスト教教育を土台とした本校の教育方針が、生徒の人格形成、生涯にわたる学びの礎となっていることが認知されているということは、生徒を教育する上で最も重要な点で、教職員と保護者が一致して、生徒の人格教育にあたっているということであり、これが本校の教育の最も大きな特徴である。</p> <p>ニーズにあった教育活動、また教職員の熱意については、肯定的な回答が81%を超えるものであった。</p> <p>教育活動、学校行事、生徒会活動、クラブ活動については、肯定的な回答が92%を超えた。特に学校行事、生徒会活動、クラブ活動についての満足度は高い。クラブ・行事の学習との両立は常に課題としてあるが、全人的な成長のために、これらの活動が果たす役割はとて大きく、生徒が主体となり、協力して目標を達成していく活動をこれからも大切にしていきたい。これらは、一貫教育の中で、学習や将来の進路選択、夢の実現へのモチベーションアップに確かに繋がっている。</p> <p>教育環境、施設設備の整備についても90%の保護者から肯定的回答をいただいた。</p> <p>庭の草花、木々は、創立から133年大切にしてきた重要な教育環境であるが、2016年度は、安全の為に木々の大がかりな伐採、中学校舎の外壁補修、高校校舎の内装の安全点検と補修を行った。</p> <p>教室整備にも力を入れ、すべてのHRに電子黒板設置を完了、高校校舎のカーテンを新しくした。</p> <p>また、大地震に備えての備蓄や必需品の整備も少しずつ進めている。さらに、現在はチャペルの冷暖房設備の入れ替えの準備を進めている。</p>	<p>教職員への自己評価アンケートは、下記の表「3. 本年度の取り組み内容および自己評価」における「評価指標」に基づいて行った。前年度との比較を行う主旨から、中期計画の項目とアンケート項目は、完全には一致していないが、本年度について必要な項目を追加してアンケートを行った。</p> <p>また、分析は肯定的回答のパーセンテージを確認しながら進めたが、教員の回答は、昨年度と同様にどの項目についても「思う」よりも「やや思う」のパーセンテージが高い傾向にあり、掲げている課題への道は険しく、教職員が現状に満足せず、まだまだ高いところを目指している途上であることがわかる。</p> <p>I 建学の精神と教育理念の実践</p> <p>キリスト教に基づく人間理解の深化／建学の精神の再認識と再構築</p> <p>キリスト教教育による人格形成、生涯学習の土台の形成について、肯定的な回答は86%と高いが、昨年度からは7ポイント近く下回った。(内訳として「思う」は6ポイント上昇、「やや思う」が13ポイント下降)本校教職員は、この項目について、かなりはっきりと一致し、手応えも感じて教育にあたってきたが、教育力が不十分であると感じている教職員が少し増えている。本校の教育の核となるところなので、互いの意見交換が特に必要である。</p> <p>II 教育の内容と学習支援の充実</p> <p>学力向上 中高6年間を見通して、基礎学力を定着させることに加えて、改革される大学入試に対応するカリキュラムを創るべく各教科で改訂作業を継続している。その上で各々の授業計画、指導目標を立て、授業を行った。「目標を明確にできたと思う」と肯定的回答を寄せた教員が74%であり、昨年度から微かに上昇。時代の変化が激しく、教職員の世代交代が行われる中、また今年度は国際バカロレア(以後IBと略す)候補校としてのカリキュラムの準備に入ったことも重なり、IBカリキュラムと6年一貫のカリキュラムとの関係について研究すべき未知の部分も大きい。そんな現状の中で目の前の生徒と向き合い、根気強く指導の質を維持しようと奮闘している教職員の姿が見えてくる数字である。(中学生の授業アンケートに見られるA「教員の授業内容への年間計画」、B「授業のわかりやすさ」が5ポイント前後アップしていることにも表われている)、教員間で研究、相談し合いながら発展させていきたい。</p> <p>一方で、「1年間で生徒の学力(学力推移、スタディーサポート等を参考に)は上昇したと思うか」との問いについては、今年度は54%とやや下降となった。ただし内訳について昨年度が「思う」9%、今年度「思う」20%、と確かな手応えを感じた教員が約10名いることは大きい。学力層が下方に広がる現実から、学習指導の工夫と努力が地道に継続されていることがわかる。</p> <p>自己管理 昨今の生徒の現状から、学力向上を目指すため、スケジュール等の自己管理能力の養成は必須であると考え、中学生からこの課題の指導に力を入れてきた。自主学習時間(今年度より中1・2は「論理エンジン」の学習に切り替え)、OJダイアリーの取り組みなどである。「自己管理能力の向上」についての教員アンケートの結果は、高校生についての回答も、中学生についての回答も、肯定的回答は残念ながらともに約12ポイント下降である。取り組みを継続しているにもかかわらず、一昨年から下降を続けている(併せると20ポイントの下降)のが現状である。情報の溢れる中、自分に必要な情報を選ぶこと、スケジュールを立て自分の生活を管理していくことは年々難しくなっているということであろう。また生徒たちの姿勢として、自ら目標を立てて主体的にというよりは、失敗なく指示されたことをこなしていくという受け身のあり方が学習、クラブ活動、生活面すべてに定着している。SNSをはじめ、次から次に配信される情報に振り回されることなく、時間とエネルギーを自身の向上のために使うためには、授業・評価そのものの転換が必要であり、それこそが今行われている教育改革の中心となるだろう。</p> <p>授業・補習内容の充実 高校生の希望者補習(水曜・土曜講座)、自習用講座(BB講座)の成果については昨年度から3.2ポイントの上昇であった。少数ではあるが、これらの講座を利用して成果を上げている生徒がいることは確かである。来年度に向けて、設定科目、教員とのマッチング等、更に見直しをしてスタートしようとしているが、ここにも生徒自身の主体的な出席の継続を励ます指導が必要である。</p> <p>一方で分割授業、習熟度別授業については、肯定的な回答は、昨年度から6ポイント上昇(一昨年度からは16ポイント上昇)した。分割のあり方、テキストの変更、担当者の工夫、努力により、良い方向に向かっていると考えられる。</p> <p>また、電子黒板や、MM(マルチメディア)教室の利用については3.8ポイント上昇であった。継続的な利用とその工夫が進んでいる結果である。さまざまな教科の授業に活用していくため、環境整備も課題である。</p>

は、中学生は 60%台、高1・2は 70%台、高3でようやく 87%に達する。今後も生活指導の重要な項目として、この自己管理能力の獲得が上げられる。OJ ダイアリー、試験2週間前学習計画表の提出など、具体的な取り組みを続けながら推進したい。

学校行事について

学校行事については、今年度も、生徒会主催の行事、学年ごとの行事、ともに6学年ほぼ 90%以上の生徒が、「生徒同士のつながりを深めるために有意義である」と答えている。卒業を控えた高3生徒の肯定的回答率は 95%で、最終的な生徒の行事への満足度は大変高いことがわかる。これは生徒が主体的に行事を運営し、かつ参加していることによる成果である。

学校生活について

「楽しく充実している」については、「クラブ活動が活発である」という項目については、86～96%の肯定的回答が得られた。一方、生徒からの相談に対する教員の姿勢、学校生活への教員の指導の姿勢については50%～80%台まで学年によってばらつきがある。この項目についても、宗教・解放教育への意識と同じ中2・3で一度下降し、高校生になって回復、上昇する傾向が見られる。生徒が中2・3で一度、大人に対する反抗期を迎えて壁にぶつかり、やがて教員とのコミュニケーションや信頼が少しずつ構築されていくと考えることができる。

進路指導について

中2から中3にかけて、どの学年も高校のコース選択をきっかけに、進路についてよく考えるようになっていくようだが、高1で少しカーブが緩み、また、高2になって真剣に考えるようになる傾向がある。高2から高3にかけては緩やかなカーブになり、学年によって少し下降したりと揺れる。ただ、「卒業後の進路に向けて考えたと思うか」の項目は、どの学年もほぼ同じ傾斜で右肩上がりになり、中3からは急カーブで肯定的回答率が伸びていく。将来進みたい方向については中3くらいで概ね見えてきたとしても、昨今の大学入試の形式や出題傾向などの変化、情報収集、整理の難しさから、入試を突破するための教科選択や時間の使い方を決めかねる生徒たちの迷いが、コース選択の高校での微妙なカーブに顕れているようである。

国際教育について

留学生との交流についてはアンケートを実施した高校全学年で 84～90%の肯定的回答を得ている。年間留学生の印象が一番大きいと思われるが、短期、中期で訪れる留学生と本当に仲良くなる生徒たちを見ると、このような交流が何よりの互いの文化の理解と平和の基礎であると思わされる。

家庭への連絡、情報提供については、肯定的回答は平均すると81%であった。昨年度91.5ポイント上昇やや改善した。

本校での保護者への連絡ツールの主なものは生徒に持ち帰らせるプリント類である。行事や、クラブ等についての情報提供としては、学年、学級通信、H.P.のクローズドサイト等がある。緊急時はNTTコミュニケーションズのFairCastを利用している。

この結果から考えられることの一つは、保護者宛のプリント類が、生徒から適切に手渡されていない可能性があること。二つ目は、思春期の子どもたちの学校生活に対して、保護者としては心配が多く、学校からの細かな情報提供を求めておられるということである。おそらく、行事や予定等の連絡はもちろんであるが、我が子の学習状況やクラス、クラブ活動での様子などを知っておきたいという思いである。学校での様子を全く話さなくなる子どももいる中で、保護者の気持ちとして共感できる。教職員・保護者が生徒の自律・自立を阻害しないように、見まもりを続けるためにも、学校と保護者間の信頼と連携が重要である。

また、個別に対応が必要な生徒に対する連絡や手当について、教科担当と担任の細やかな連携が必要だが、行き届いたサポートを行うには課題も多い。保護者と協力してその生徒に必要なサポートに今後も努めたい。

学校としては、配布したプリント類は、クローズドサイトにその都度アップすることとし、また、必要な情報はH.P.や学年、学級通信を利用して提供していきたい。保護者にも、できる限り子どもとの対話を心がけていただきつつ、心配なことについては、学校に連絡をいただき、連携して見守るように今後も努めていきたい。

へール会(PTA)活動について、昨年と同様、保護者の93%から肯定的回答を得た。

本校は PTA を創立者の名前をとってへール会と呼んでいる。へール会の役員(本部委員・学年委員・学級委員)は、担任をはじめ教職員と協力して、互いの親睦をはかりつつ、学校の多くの活動に協力してくださっている。中高6学年の保護者有志、教職員約 200 名が集う親睦会、私学助成のための署名活動は保護者全員にご協力をいただいている。また、発足して6年になるお父様の会ウキルミナ・メンズクラブ(WMC)の会員も少しずつ増え、へール会への父親の関心も高まり、行事への参加者も年々増えている。

また本部役員の方々には、校外で行う学校説明会(evening 説明会)において、保護者の立場から学校の紹介をしていただく形でご協力をいただくなど、多岐にわたって支援していただいている。

ビッグシスターによる放課後学習プログラムについては 4.4 ポイント上昇であった。高校教頭の下、中1・2、高3の学年の担当教員と、高3生徒たちが、支援の必要な生徒たちへの寄り添う学習に継続的に取り組んでいる成果である。

新しい学力観・大学入試改革への対応 上記課題について、「教科、学年での話し合い、準備の進捗状況」については、約 30%の教員が肯定的回答を寄せているが、まだ始まったばかりであり、学校全体で取り組みを続けていきたい。また「英語の外部検定受験への働きかけ」については肯定的回答 66%、14 ポイント上昇となった。進路部長を中心に、学年、担任、クラブ顧問の協力で良い方向に進んでいる。「協定校推薦制度の進路保障の意義」については 67%の教員が肯定的回答を寄せている(昨年度より微かに下降)。協定校推薦の人数枠が 25 名から 40 名に拡がり、推薦入試出願までに要求される到達レベルが上がっていることから、はっきりした動機と学ぶ意志が必要である。生徒たちが推薦入試への意識を高く持ち、大学入学に向かって学び続ける姿勢を保つように指導していくことが重要である。

英語科・英語教科の改革 昨年度から実施の「英語科高2生徒全員を対象としたエンパワーメント授業について」、また「外部検定目標への取り組みについて」の肯定的回答は 82%(昨年から 16 ポイント上昇)、「国際特別入試制度及びその制度による入学生の課外授業の成果についての肯定的回答は約 67%(昨年から 5.5 ポイント上昇)であった。本校の教育によい影響があったと考えられる。

理系2コース(2類・1類)の導入 内部生、高校入学生ともに理系への関心が高いことから、2類難関理系大学志望、1類幅広い理系大学志望として今年度より2コース制を導入、高校募集人数も理系で 30 名とした。このことが、生徒たちの進路選択の幅を拡げ、希望する学習環境の提供に役立ったかという問いに対して、肯定的解答は 51%であった。理系を諦めずに済んだ生徒は増えたが、1類生徒がモチベーションを保ち、しっかりと学習に取り組み、希望の進路を実現するところまでを考えての教員の慎重なアンケート結果であると考えられる。

生徒の生活全般に対する指導 SNS の利用については、「生徒への適切な指導について」肯定的回答は 31%(14 ポイント下降)、「保護者の理解と協力を得られたかについて」41%(16 ポイント下降)、保護者の危機感も年々強くなり、学校としても保護者向け講演会を持ち、保護者との連携を目指しているが、個人情報流出、人間関係のこじれ、依存による学習、健康への影響、ネットショッピング、トラブルに巻き込まれての被害など、なかなか指導が追いついていないのが現実である。

服装、身だしなみ、挨拶、公共のマナーの指導について、どれも肯定的回答のポイントは同じか微かに下降である。積極的な取り組みが不足しているという結果が出ている。生活指導委員会を中心に地道に取り組んでいきたい。

留学への取り組みの充実 留学については、留学生の受け入れ、本校から送り出す留学生の学びの成果ともに充実しており、留学を希望する生徒へのサポート体制も整っているという教職員の認識(肯定的解答 84～90%)であるが、学びの成果とサポートの項目は昨年度から 5%前後下降している。めまぐるしく変化する国際情勢、ニーズの多様化、大学入試改革の方向により、卒業後の進路にも直結していくことから、情報収集と研究の継続が必要である

生徒の生活全般への指導／心身の健康と安全を守る指導 学校、学年の人権プログラム、支援教育(長期欠席、不登校傾向等の生徒への指導)について、肯定的回答は 67%～78%で(1～8 ポイント下降)あった。取り組みは精一杯継続しているが、なかなか思ったところまで到達できず、互いの意見を交わし合いながら進めていくだけのゆとりを十分に持てていない教職員のジレンマが伝わってくる項目である。厳しい現実ではあるが、助け合い、生徒をサポートしていくことにたゆまず向き合っていきたい。

Ⅲ教育の実施体制の改善

募集・広報活動 「本校の特色を活かした取り組みを提案、アピールできているか」「本校の広報活動、募集対策は適切か」「募集・広報に積極的に関わることができたか」の各項目について、肯定的回答率は昨年度は 52%～64%あったが、今年度は 67%～77%と、大きく上昇した。結果としての入学者数は、2018 年度については微減であるが、教職員の意識は高まり、広報活動への協力も得られていることは心強い。時代の厳しさは増しこそすれ緩むことはないが、本校らしい教育を進めていくために互いに意見を交わし合い、課題を共有し、本校の魅力を受験生に伝えていくことで一致していきたい。

図書館活動 約 17 万冊の蔵書を誇る本校図書館は、中高大短が利用する充実した図書館である。専門知識を持つ司書(専任を含め 6 名)が、手厚く利用のサポートを提供し、生徒の豊かな学びに貢献している。教職員の図書館の活用については 13 ポイントの上昇したが、まだまだ改善の余地がある。またシステムやサービスの問題よりも教職員が多忙で、図書館を利用するゆとりがない現実も推察される。

授業評価について

どの項目についての回答も、全体としてみると昨年度とほぼ同じ数字が出ている。

A「教員の授業内容への年間計画」、B「授業のわかりやすさ」についての肯定的回答は中学、高校の平均で71.％～89％までの開きがあり、どちらも中学生の方が2～3ポイント高い。C「クラスに一体感を生み出す指導」、E「集中して授業を受けているか」についての肯定的回答について、中学、高校の平均で71％～87％と開きがあるが、こちらは高校生の方が2～5ポイント高い結果となった。D「興味、関心を引き出す工夫」の項目は、毎年他の項目に比べて数値が低く出る。今年の肯定的回答率は、中学、高校の平均で58％～83％までの開きがあり。今年も高3が群を抜いて高い数値となった81.7％(昨年82.9％)。受験勉強によって主体的に授業に取り組むため、授業の内容への興味が深まる傾向にあることがわかる。今年の特徴は、中学1・2年生が昨年の中学1・2年生をすべての項目について上回っていることである。学習への意欲的な取り組み姿勢が数値に表れている。

生徒はE「集中して授業を受けているか」の数値を上げていくこと、教員はA「教員の授業内容への年間計画」、B「授業のわかりやすさ」を上げていくことで、C「クラスに一体感を生み出す指導」D「興味、関心を引き出す工夫」の数値が上昇していくであろう。

各教員の授業評価は、個別に知らせているが、同じ教科、同じ学年を何クラスか担当している教員の評価が、クラスによってかなり差がある(特に中学生)ことから、教員と生徒の関係づくりが、授業成果に直結していること、また教員の声かけ、発問一つでその教科への生徒の興味や意欲が喚起されることが確認できる。

ICTを利用した授業等への取り組みの推進

今後を見据えて必要な項目であるので、今年度より項目に加えた。

今のところ、少しずつ教科での取り組みは進んではいるものの、学校として全体の取り組み(生徒が各自タブレットをもって行う授業)についてはまだ手つかずである。肯定的解答はそれを反映して24％であった。

教職員の研修プログラム 本校新任教員対象研修「チームOJ」、キリスト教学校教育同盟の中堅者研修、カウンセリング研究会のプログラムについては、役立っていると感じている教職員は今年度は半数をやや上回る結果となった(微増)。これはプログラムの内容についての課題もあるが、多忙を極める現状の中で、実際にこれらの研修会に参加することもままならない実情も大きく影響した結果であると考えられる。学内の取り組み、また本校を会場にしたキリスト教学校教育同盟のプログラムへの参加等をこれからも呼びかけ、教員の学ぶ機会を保障するように考えていきたい。

IV生徒支援

進路指導の取り組み

中学1～高校3年まで各学年での進路プログラムは生徒のモチベーションアップに大いに役立っている(肯定的回答82％昨年から6ポイント下降)、高校3年生の大学入試直前のプログラムについては、肯定的回答69％(昨年から2ポイント上昇)と昨年どと大きく変化のない結果であった。大阪女学院大学、短大との連携については44％(19ポイント上昇)と、大学短大のユニークで優れたカリキュラムに魅力を感じて、進学先の候補に入れる生徒も増えており、入試情報の共有等少しずつ連携が進んでいることは中高にとっても大学短大にとっても望ましい結果である。

V危機管理

「地震をはじめ防災への取り組みについて」は少しずつ進めているが、避難時の備蓄、地域との連携等まだまだ多くの課題があり、計画途上である。今年度は、体育館の耐震補強工事が完成したこともあり、肯定的回答は昨年並みであった。

VI. 教職員の人権意識の向上

生徒・保護者・教職員からのハラスメント(体罰を含む)についてのアンケートを実施し、上がってきた事象について対応を続けている。ハラスメント防止のための取り組みについての肯定的回答61％、ハラスメント委員会の機能についての肯定的回答は49％であり、いずれも約8ポイント下降している。アンケートの対応にあたる相談委員(教職員の互選)の立場の難しさはこれまでも指摘されてきているが、新任教員への制度や意義についての説明が不十分であることも含めて、制度やアンケートについて振り返りや意見交換が必要な時期にきている。生徒と教職員自身の心身の健康、命を守るための重要な取り組みとして明確に位置づけていきたい。

VII教員の労務環境改善

1週1日の研修日等労務環境の改善については、肯定的回答は54.9％(昨年から7ポイント上昇)。今後も教員が教育のために研鑽を積むゆとりが少しでも持てるよう、労務環境について改善をめざしたい。

VIII施設・設備の保全と充実

さまざまな施設設備の改修が必要となっている現状から、今年からアンケートにこの項目を追加した。肯定的回答は72％であった。経済的な裏付けが必要なことでもあり、なかなか十分と言うわけにはいかないが、教職員の意見を聞き、理解を得て進めていきたい。

3. 本年度の取り組み内容および自己評価

	重点目標	具体的な取り組み計画・内容	評価指標 *通し番号は教職員アンケートの番号 中期計画の項目順とちがっているため、 一部順番に入れ替わりがあります。	自己評価
I. 建学の精神と教育理念の実践	<p>1. キリスト教に基づく人間理解の深化</p> <p>2. 建学の精神の再認識と再構築</p>	<p>時代の求めに応じた宗教教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 日々の礼拝、宗教行事(修養会、伝道週間等) 宗教部付クラブ活動、有志による施設訪問、ボランティアの継続。 被災者支援の会による東北ボランティアキャラバン(2015年度からは年1回夏)、東北支援物販(文化祭等)、追悼礼拝の継続 日本国際飢餓対策機構、ワールドビジョンの行っている里子支援への協力 釜が崎での「炊き出し」への参加 	<p>1. 礼拝、宗教行事等、キリスト教教育全般を通して「愛と奉仕」の精神をもって、互いの個性を尊重し合い、自分自身の生き方を考えるよう導いているか。</p>	<p>本校の精神の土台であるキリスト教教育については、132年の伝統の中で生徒、保護者の理解と協力を得て、教職員の明確な意識のもとに、「<u>生き抜く力</u>」「<u>愛と奉仕の精神</u>」を養うという人格教育として成果を上げていると自負する。</p> <p><u>自分に与えられた力を自分のみではなく、他の人に用いるために学ぶ意識が生徒に育っている。</u> <u>女子校という環境を最大限に活かした教育実践を行っている。</u></p> <p>教職員の世代交代の中で、<u>本校のキリスト教教育の理念が時代の求めに応じた形で再認識、再構築されるよう学院全体で継承していく。</u></p>
II. 教育の内容と学習支援の充実	<p>学力向上の取り組み</p> <p>—新しい学力観への対応—</p> <p>大学入試改革 (2020年新指導要領改訂)</p>	<p>(1) 自学自習・自己管理能力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> OJダイアリー、学習計画表の活用による自己管理能力を身につける指導を継続する。 中学校校舎内に中学生用自習室を設置を検討。 高校校舎の質問コーナーの拡充の検討。 * 分割授業、ビッグシスター制度によるボトムアップに加え、実力錬成補習、大学入試準備プログラムを継続、発展させる。 *ビッグシスター制度…推薦入試で進学先の大学が決まった高校3年生が中学1、2年生の学習を助する制度 水曜講座(高校3年文系有志補習)、土曜講座(高1・2有志補習)、BB講座を継続、充実させる。 BB講座の英検講座のみ受講する制度の拡充。 <p>(2) 論理思考力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> 論理的思考力の構築のため中学1・2年生に「論理エンジン」を導入し、中3での探究型授業(2018年度～)をスタートさせるべく準備する。 <p>(3) シラバスの検討・改善</p> <p>2020年の大学入試改革を見据えて、中高一貫カリキュラムを見直し、各教科でシラバスの改訂を行う</p> <p>(4) 英語科の改革</p> <ul style="list-style-type: none"> 4技能外部検定試験に対応するため、高1・2の英語の授業にスピーキングの内容を取り入れ、GTEC CBT、他の検定試験も積極的に奨励する。 2015年度S2英語科全員参加で始まったエンパワメントプログラムの内容の継続・発展。 <p>(5) 「国際特別入試制度」の継続と発展</p> <p>(中学2015年度よりスタートしたこの入試制度の入学後の学習プログラムの整備を進め、国際理解教育を推進する。</p> <p>(6) 国際パカロレアの導入</p> <p>日本語DP校としての認定を目指し、探究型学習、アクティブラーニングについて全教員が授業実践のために学びを進める。</p>	<p>2. 中高6年間の指導目標を明確にして指導できたか。</p> <p>3. 生徒の学力(学力推移調査、またはスタディーサポート等のデータを参考に)は全体的に見て上昇したと思うか。</p> <p>4. 生徒の自学自習、自己管理の力は向上したと思うか。(高校)</p> <p>5. 自主学習時間、OJダイアリーにより、生徒の自己管理の力は向上したと思うか。(中学)</p> <p>6. BB講座、土曜講座、水曜講座によって、生徒の学習が充実したものになったと思うか。</p> <p>7. 分割授業、習熟度別授業による成果はあったと思うか。</p> <p>9. ビッグシスター制度による放課後の学習プログラムは成果を上げていると思うか。</p> <p>10. 今後の国公立入試等の改革、(探究型・合科型)に向けて、学年や教科での話し合い、準備は進められたか。</p> <p>11. 大学入試の外部検定利用に向けて、生徒たちが英検、TOEIC等、外部検定を受験できるように、学校としての学年、教科、クラブ等への働きかけは十分にできているか。</p> <p>12. 現在の協定校推薦制度は、生徒の進路指導、進路保障のために十分に活用されていると思うか。</p> <p>13. 継続中の英語科改革(高2エンパワメント授業、授業改革、外部検定目標達成等)について成果はあったと思うか。</p> <p>14. 国際特別入試制度、及び国際特別入試による入学生の週1回の課外授業について、国際理解教育のため</p>	<p>教員は指導目標を明確にし、生徒の学力を上げるべく努力を続けている。進路の決定した高3に協力を得て<u>中1・2の学習支援(ビッグシスター制度)も地味ではあるが確かな学力保障</u>になっている。また、<u>英語・数学の分割授業も学力の向上に役立っている。</u></p> <p><u>「自由」に基づく自己管理の力を育てるため、中学生ではスケジュール管理のための取り組みを続けている。また、高校生には有志補習、講座を提供してきた。一定の成果は見られるものの、情報の氾濫や、SNSの広がりによる影響が大きく、生徒の主体性や自己管理能力を伸ばしていく指導や対応が追いついていないのが現実である。</u></p> <p><u>授業・評価の方法そのものの改革により、学校での学習への取り組みそのものが主体的なものになるような根本的な教育改革が必要ではないか。</u>今後も各教科を中心に、学年、学力検討委員会等様々な単位で検討を重ね、<u>アクティブラーニングなど生徒の意欲を喚起する授業形態を工夫</u>していきたい。自己管理力は、「自由」を掲げる本校にとっては特に重要な力であり、これからの時代には欠かせない力である。生徒とともに根気よく取り組んで行きたい。2020年大学入試に向けて、改革が続いていく。困難も多いが、探究型、横断型のトータルな学力、を身につける方向に教育を推進していきたい。</p> <p><u>外部検定に対応した希望者対象の土曜講座を開講している。意欲的に取り組む生徒は成果を上げている。</u> 中学、高校1年からの検定受験、資格取得を今まで以上に呼びかけていきたい。</p> <p>関西学院大・同志社女子大・神戸女学院大との協定校推薦制度は、<u>推薦枠が拡大され、魅力ある制度として、生徒たちの進路保障に役立っている。</u> 同時に、高校在学中にかなり高い英語力が求められる現実があるため、高2までの学力レベルの伸長に努める必要がある。</p> <p>本校では、中学から4技能を鍛える英語教科の充実した学習を行っているが、<u>2015年度より高校2年生英語科生徒を対象としたエンパワメントプログラムを実施し、成果を上げている。</u> 受験生に対しては<u>国際特別入試(中学)</u>とその後の<u>国際教育プログラム</u>を続けている。<u>着実な成果を上げている。</u></p>

	<p>(7)理系2コース制の導入 理系を1類、2類の2コース制を充実したものとする。</p> <p>2. 国際理解教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> * YFUの年間留学生受け入れ * オーストラリアRavenswood校(姉妹校)との交換留学 * カナダ、オタワLongfield Davidson校(姉妹提携校) * YFU韓国からの短期交換留学(1ヶ月) <p>上記活動を通して国際理解教育に取り組む。</p> <p>3. 生徒の生活全般への指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人間関係を構築するカールルの遵守、マナー・礼儀の尊重、コミュニケーションによる 他者理解への育成 ・ SNSを利用するための知識、メディアリテラシーについて適切に学ぶ。 <p>心身の健康と安全を守る生活指導と生徒支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業・学級活動・生徒会活動・クラブ活動等の活動が安全かつ充実したものになるように努める。 ・ 自ら健康の保持増進を図る能力を育成する。そのために保健室・教育相談室(学校カウンセラー)、サポートルームが連携し、生徒・保護者をバックアップする。 ・ 生徒の言動・表情・着衣などを注意深く観察し、虐待の懸念・精神不安のある生徒を見逃さないよう、異常の早期発見に努める。 ・ 通学時の安全指導に努め、警察と連携しつつ不審者の警戒をする。 ・ 学校外での生徒の事故やトラブル、迷惑行為等の窓口となり対応する。 ・ 必要に応じて生徒の主治医や関係機関と連携をとり、適切な支援を目指す。 <p>4. 学校行事による集団づくり</p> <p>生徒がそれぞれの行事の意義、目的に照らして、自主的、かつ計画的に集団を動かしていく力を身につける機会として学校行事をとらえ、協調して互いの力を活かすチーム力を養う。特に、時間、費用、あとかたづけ、ゴミ処理等、自分たちでトータルに管理していくことができるよう指導する。</p>	<p>に成果を上げていると思うか。</p> <p>15. 理系2コースの導入により、中学入学生及び高校入学生の進路の選択肢を拡げ、学習の充実をはかることができていると思うか。</p> <p>(中期計画の項目順に記載しています)</p> <p>24. 留学生の受け入れにより、充実した交流ができたと思うか。</p> <p>25. 本校から留学した生徒は、留学の成果を上げることができたと思うか。</p> <p>26. 留学を希望する本校生徒に対して、適切なサポートができていると思うか。</p> <p>19. SNS の利用について、生徒に必要な指導ができたと思うか。</p> <p>20. SNS の利用について、保護者に理解と協力が得られたと思うか。</p> <p>21. 服装、身だしなみの指導は適切だと思うか。</p> <p>22. あいさつについての指導は適切だと思うか。</p> <p>23. 公共のマナーについての指導は適切だと思うか。</p> <p>29. 長期欠席、不登校傾向等の要支援生徒への支援は適切であったと思うか。</p> <p>30. いじめ等の事象の発生を未然に防ぐため、意識的に取り組めたと思うか。</p> <p>31. さまざまな課題について、教員間でコミュニケーションを取り合い助け合って取り組むことができたと思うか。</p> <p>28. 学年、学校の人権教育のプログラムは、時代の変化に対応し、充実していると思うか。</p>	<p>本校では、2018年に英語科の中に国際バカロレアコース(日本語ディプロマ)の設置を目指し、現在候補校となっているそのための<u>教員研修や、カリキュラム作成、評価をはじめとしたさまざまな体制づくりが、全教科、全授業の探究型、横断型授業のモデルとなっていくと考えている。</u></p> <p>本年度より理系を希望する受験生の増加に伴い、<u>理系を2類・1類の2コースとした。</u>入学生の進路希望を叶えられるように、生徒を導いていきたい。</p> <p>留学生の受け入れについてはYFUの年間留学生1名他、中期、短期数名の受け入れにより、<u>よい交流が実現している。</u></p> <p><u>留学については、高校1年生から短期、中期、長期、さまざまなプログラムが設けられており、生徒、保護者からも評価を得ている。</u>時代のニーズが高まる中で、より実質的な内容をともなったものにするべく努力を行う。近年は、<u>海外への進学が注目されている。</u>導入を目指すIBコースは海外進学を目指す生徒にとって特に意義深いものになるだろう。</p> <p>SNSの利用指導は、喫緊の対応を迫られている課題である。<u>一昨年度より、積極的に生徒、保護者、教職員対象に学習会を行ってきた。保護者自身の意識が少しずつ高まり、危機感をもって家庭での管理の必要性が理解されてきたように思う。</u>しかし、進化していくSNS利用について、生徒自身が管理を行うことは至難の業である。<u>保護者と協力して生徒の指導に当たりたい。</u></p> <p><u>身だしなみ、挨拶、公共のマナーについての指導を地道に行ってきたが、目指すところまでの成果が見られない。</u>今後もさらに指導を継続する。</p> <p>7年前にスタートした支援教育委員会は、教頭がコーディネーターを担い、担任、学年主任、スクールカウンセラー、養護教諭、サポートルーム指導員、生活指導部長、教務部長が構成員となり、校長のもとに<u>チームで支援プログラムを検討する体制が機能している。</u>担任が一人で抱え込まないように、適切なサポートができるように互いのコミュニケーションを大切にしていきたい。</p> <p>この支援機養育委員会はいじめ防止対策委員会を兼ねている。いじめについての相談があった際に招集することになっている。</p> <p><u>本校のさまざまな行事は、宗教教育、解放教育とともに、生徒の人格形成に大きな影響を与える教育である。</u>生徒は、行事に主体的に関わる中で、人と繋がり、自分が責任を担い、仲間とともに何かを達成していくことの意味を深く感じて、<u>広い意味でのソーシャルスキルを身につけて行く。</u></p> <p><u>解放(人権)教育のプログラムについては、高校3年生でキリスト教教育の「愛と奉仕」の実践とともに一つとなって生徒の心の成長、生きる力となって実を結んでいる。</u></p>
--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p style="text-align: center;">Ⅲ. 教育の実施体制の改善</p>	<p>1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み</p> <p>2. 教員の人材育成</p> <p>3. 図書館機能の充実と教員との連携</p> <p>4. 組織の再構築と運営方法の見直し</p> <p>5. ICT教育の推進</p> <p>6. 中高教務のシステムの統一と展望</p> <p>7. 中高大短連携プログラム</p>	<p>(1)広報の充実 (2)全教員での取り組み (3)入試対策室の充実 (4)中学「国際特別入試制度の継続と発展</p> <p>(1)建学の精神の学び (2)世界の変化や課題についての学び (3)支え合う組織づくり (4)他校との連携 (5)新しい学力観への対応 (6)新しい授業形態(アクティブラーニング)への対応</p> <p>(1)蔵書の充実 (2)利用教育 (3)広報の充実 (4)図書委員会活動 (5)その他 タブレット端末を活用した授業のための環境整備</p> <p>・中高一貫教育充実のため、若い世代の教員が中高6学年を偏りなく、すべて経験し、どの学年に所属しても、一貫教育の展望をもって指導できるような人事に努める。 ・学年団全員が学年全体の生徒を見る意識を明確に持つことにより、一人ひとりの教員が臨機応変に判断する力、迅速に対応する力を身につける。 ・平日の放課後のクラブ活動を充実させることにより日曜日・祝日のクラブ活動を縮小し、クラブ員・顧問の休養日を確保する。また、日曜日の教職員の教会出席を奨励し、学校以外の共同体を教職員が持つようにする。</p> <p>全ての中学生にタブレット型の情報端末を配布、利用する教育を 2020 年度に実現することが提唱されてきた。準備のためモニター教員にタブレット型情報端末を配布し、導入する機種・ソフト、業者の選考作業を進める。職員室・教科室を含む校舎内の一部を WiFi 環境に整備する。</p> <p>日々の出席管理から成績処理に至るまでタブレット型情報端末を利用した新しいシステムに移行する準備を始める。校務全体を新システムに移行することを念頭に、情報収集、研究に努める。</p> <p>・チャペル礼拝の奨励者の派遣 ・グローバル進路への助言 ・「核廃絶のプログラム」などの研究への参加</p>	<p>3 2. 変化する時代の中で、社会の課題に対して大阪女学院の特色を活かした取り組みを提案、アピールできていると思うか。</p> <p>3 3. 本校の広報活動、募集対策は適切だと思うか。</p> <p>3 4. 募集・広報に積極的に関わることができたと思うか。</p> <p>3 5. 授業、進路指導において、図書館を有効に利用できたと思うか。</p> <p>3 6. 解放・生活指導等教職員研修会、チーム OJ、学院全体研修会、キリスト教学校教育同盟主催の中堅者研修、カウンセリング研究会等は、学校運営、教職員の集団づくりに役立っていると思うか。</p> <p>8. 授業において、電子黒板、プロジェクター、MM 教室等が有効に活用されていると思うか。</p> <p>2 7. ICT を利用した授業等への取り組み、今後の計画は進んでいると思うか。</p> <p>1 8. 大阪女学院短大・大学との連携は進んでいると思うか。</p>	<p><u>教職員全員で募集・広報にもあたっていくことができた。</u>一昨年からは、専任教員全員が本校入学生の出身中学校の訪問を行い、生徒の現状報告と学校紹介を行った。本校の教育内容を現場の教師が紹介する良い機会となり、中学の先生方の適切な進路指導による受験生が増えている。本校教員自身にも外から学校を見るよい機会となった。<u>オープンキャンパス、イブニング説明会、地域説明会、入試説明会</u>に加え、今年度は<u>キャンパスナビ</u>という低学年から参加できる行事も行った。教職員全員で臨み、受験生である小・中学生と応対する中で、本校の魅力を教員一人一人のことで伝えることができた。ただ、昨今の私学の受験事情は厳しい。生徒の成長第一、教育内容の充実を大事にして、運営を進めていきたい。</p> <p>全生徒への丁寧な利用ガイダンスが行われ、授業や課題などで、<u>十分活用できる充実した図書館であり、司書の助言も受けられるため恵まれた環境であるが、</u>生徒の自由な利用を別にすると、<u>一部授業で利用されているにとどまる。</u>今後の授業、レポート課題等における利用の研究が必要である。</p> <p>教職員世代交代が続く中、<u>建学の理念をはじめとして、様々な形での目に見えない指導上の財産の継承</u>が急がれる。ふだんの業務の中だけではなく意識的に研修等を行い、また校外の研修会に参加して語り合う機会が必要である。しかし、多忙を極めるため、「研修どころではない」現実である。だからこそ、<u>互いの悩みや募る思いをことばで伝え合う機会が重要である。</u></p> <p>学習に関わる環境、施設整備については、重要課題として取り組みを続けている。<u>電子黒板、MM 教室については少しずつ利用が進んでいる。</u></p> <p>学校全体として、<u>生徒各自にタブレットを持たせる方向での準備は遅れている。</u></p> <p>この1年で中高の卒業生、教員の、大学短大への認識は変わってきた。<u>連携は進んでいる。</u></p>
<p style="text-align: center;">Ⅳ. 生徒支援</p>	<p>自己実現を促す進路指導</p>	<p>(1)進路キャリアガイダンスの充実 (2)基本的学習習慣の確立 (OJダイアリー・ビッグシスター制度) (3)英語外部検定への対応 (4)新しい大学入試への対応 (5)併設大学・短大の特色を活かした進学指導 (6)協定校推薦枠の拡大</p>	<p>1 6. 各学年で行われる進路プログラムは、生徒の意識、意欲を高めるために役立っていると思うか。</p> <p>1 7. 3学期のセンター対策、私大、2次対策のプログラムは、大学入試直前のサポートとして成果を上げていると思うか。</p>	<p>中高での<u>進路指導のプログラムは、生徒により影響を与えている。</u>また、<u>進路室からのさまざまな情報の発信は適切である。</u></p> <p><u>国公立入試センター、前期、後期入試をサポートする高3、3学期のプログラムは、対象の生徒を支え、成果を上げるために定着しつつある。</u></p>

V. 危機管理	危機管理	<p>地震をはじめ防災への取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> 特に大地震を想定した危険回避訓練、およびダメージコントロールの観点から事後の生徒、教職員の緊急避難生活を想定し、準備ならびにシミュレーションによる想定訓練を進める。 地震など自然災害時に必要な食料と水の備蓄の拡充、自宅への連絡方法の確認、帰宅困難者が出た場合の対策について検討する。 <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> 早急に構内の歩車分離の施策を検討する。 文化祭・体育大会など来客の多い学校行事の警備を継続して徹底していく。 	39. 学校の地震をはじめとする防災への備えは進んでいると思うか。	地震を中心とした防災への備え、避難訓練等、すべての取り組みは少し進んだ。 <u>非常食、水の備蓄、非常電源の確保、簡易トイレ等、購入を進めた。今後も地域と協力して計画的に進めていく。</u>
VI. 教職員の 人権意識の 向上		<p>(1)いじめ、キャンパスハラスメントの防止と対応</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒の人権に配慮した指導が十分出来るよう啓発と研修を行う。 キャンパスハラスメント規程、委員会の存在を、生徒、保護者、教職員に広く知らせて、いつでも相談できる体制づくりに努める。 キャンパスハラスメントに関する調査を継続する。 <p>(2)支え合う教職員集団へ</p> <ul style="list-style-type: none"> 現状の課題を話し合える教職員集団を目指す。 年2回の教職員対象解放学習会とフィールドワーク等、教員研修を行う。 <p>(3)特別支援の充実・外部機関との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 不登校や発達障がいなど支援を必要とする生徒をサポートするため、「支援教育委員会」を充実させ、支援のための学校チーム力を向上させる。 サポートルーム指導員は保健室と連携しながら、利用生徒に寄り添い、支援教育アドバイザーの助言のもとに支援をさらに進める。 教職員が特別支援について学ぶ機会を保障し、全教職員が意識を高めていく。 必要に応じて生徒の主治医や関係機関と連携をとり、適切な支援を目指す。 	37. 教職員組織はキャンパスハラスメント事象の防止に積極的に取り組んでいると思うか。 38. キャンパスハラスメント委員会及び調査は、有効に機能していると思うか。	指導者から生徒へのハラスメント(体罰を含む)の防止を目的として、生徒(家に持ち帰って保護者とともに記入してもらう形式)、及び専任教職員にアンケートを実施して5年目となる。 <u>教員、コーチ等指導者は、今まで以上に緊張感をもって、意識的な判断の下に生徒の指導にあたることができている。</u> しかしこのアンケートは、生徒の立場から一方的に匿名で書かれるものであるため、 <u>客観的な事実確認が難しいという難点がある。</u> 継続には、 <u>教職員同士の信頼関係と、「生徒の生命を守る」という共通の強い目的意識が必要である。</u> また、新しい教員も増え、キャンパスハラスメント規程、委員会の働き、アンケートについて改めて、 <u>その意義やあり方についての確認が必要な時期が来ている。</u>
VII. 教員の 労務環境 改善	教員の 労務環境 改善	教員の1週2休(2週間時間割は継続)制度の維持と改善に努め、より働きやすい職場にしていく。	40. 一週一日の研修日をはじめて3年目になるが、労務環境の改善は進んでいると思うか。	<u>1週1日の研修日制度は有効であるが、当然のことながら、生徒教職員全員で一斉に取る休日とは違うので、教職員間の連携、クラス・学年間についての情報共有が不可欠となる。</u> また学年や教科、委員会で臨時に会議をすることが難しく、定例の会議の回数も限られたものになるので、計画性と工夫が必要である。
VIII. 施設・ 設備の 保全と 充実	施設設備の改修	<ul style="list-style-type: none"> 南校舎の外壁塗装の計画を策定し、数年かけて外壁を塗装する。 グラウンドのスタンドの強度調査、補修を行う。 	41. 校舎、校庭、グラウンド等の施設設備の保全、補修、整備について必要に応じて、計画、実施されていると思うか。	
IX. 経費削減 と効率化		<ul style="list-style-type: none"> 少子化、不況による中学受験者数の減少、大阪府の授業料無償化制度による学校負担増などの厳しい財政事情の中、事務の一元化、諸経費の見直しを継続して行い、管理部門の経費のさらなる削減と効率化を図る。 大阪府をはじめとした教育に関する補助金制度を有効活用する。 		